

風が乾いた木の枝を鳴らす音は、人間のすすり泣く声に少しだけ似ている。聞いているだけで胸が苦しくなるような、静かで切ない響きだ。僕はその物悲しい調べに耳をすませながら、黙って空を仰いだ。雲ひとつない快晴で、どこまでも青が広がっている。手を伸ばして触れたら凍傷を作ってしまいそうなくらい、冷たく澄んだ青だった。

窓から顔を突き出してぼんやり外を眺めていると、肩を軽くぽんぽんと叩かれた。振り返ると、神妙な顔をした主任が立っており、まあ、ほら、とつばを飛ばしながらしゃべりだした。毛虫を二つ貼り付けたような分厚い唇の隙間から、チロチロと赤い舌がのぞく。まるでカメレオンだ。

「悲しいだろうけどさ、ピエロっていうのは人に幸せにする存在だから、今日も笑顔で頑張ってくれよ」

形どおりのお悔やみの言葉を述べた後、主任はそう言って部屋を去っていった。

残された僕は頭に円い帽子をのせ、大きな鏡で自分の姿を確かめる。白粉はきちんとぬられているか、目と口のまわりは赤く染めているか、スポンジでできた鼻はつけているか。順番に視線を動かして確認し、最後に道化になった自分の顔をまじまじと眺めて、はっと足りないものに気づく。傍らに転がっていた筆をとり、息を止めながら鏡に顔を近づけた。線が曲がらないように気をつけながら、明るい青で細い涙の筋を描く。できあがった完璧なピエロと向かい合って、ピエロの幸せはいったい誰が運んでしてくれるのだろう、とふと思った。

屋上へ続く階段を上りながら、またもや自分の失態に気づいて舌打ちをした。腕時計をしたままだったのだ。デジタルの腕時計をしたピエロなんて格好がつかない。僕はあわてて手首から外そうとして、今日の日付に釘付けになった。ああ、と小さく声がもれる。もう一年か、と。

デパートの屋上で働き始めてから、今日でちょうど一年だった。以前は地下の食品売り場にいたのだが、人事部の知り合いに手品が趣味だと思ったら、すぐさま屋上に移動させられた。それからはほぼ毎日、僕はピエロの格好をして、硬貨を入れると動くパンダの横で笑っている。ただ風船を配るだけのときもあれば、細長い風船で犬をつくったり、握った手のひらから花を出したり、色とりどりの玉でジャグリングをしたりすることもある。道具はすべて従業員の休憩室に用意されていて、何をするかは主任の気分しだいだった。時計を外してポケットに押し込むと、階上から子供たちの無邪気な声が聞こえてきた。注意力が散漫になっている自分に気合を入れ、階段を一気に駆け上がる。

「あー、ピエロだー」

子供たちの歓声に、反射的に笑顔を浮かべた。唇の端がかすかに痙攣したような気がしたが、とりあえず笑えたことに安堵する。慣れは怖い。初めは見知らぬ人たちに無意味な笑顔を振りまくことに戸惑ったが、今ではあらかじめ用意された仮面をつけるように一瞬で笑顔に切り替わる。どんなに悲しいときも、ピエロの化粧をすれば笑うことができるのだ。僕はいびつな笑顔の下で嗤う。滑稽なのは泣き笑いのピエロではなく、感情すらピエロに支配されてしまった自分自身だ。

カラフルな風船からリクエストに応じて色を選び出し、キュッキュツとリズム良くねじ曲げていく。手元に集まった子供たちの視線はまっすぐで、僕はいつも居心地の悪さを感じる。風船を操る手を止めずにちらりと視線をずらすと、子供たちは星のように瞳を輝かせて、次第に姿を変えていく風船をじっと見つめていた。その強いまなざしは、どんな些細なことも見逃さないぞ、という気迫すら感じられる。全部を見ようとしなくていいんだ、見ないほうがいいこともあるんだよ。そう言いたくなった自分がひどくつまらない大人に思えて、僕は何かをごまかすように大きく息を吐き出した。まだ怖いものを知らない彼らがうらやましい。

「危ないから、走っちゃだめよ」

耳の奥につんと響く声が聞こえ、僕はとっさに顔を上げた。母親が注意するのも聞かないで、三歳ほどの女の子が走ってこちらへ向かってくるところだった。

「こら、チエってば」

一瞬、立ちくらみがした。暗所からいきなり日差しの下へ出たときのように視界が真っ白になり、僕は思わず小さく唸って目を閉じた。赤くぬったまぶたの下で、ぬるい液体がじわじわと眼球を湿らせていく。涙腺を緩めたのは、たった二文字だった。その単語が胸の奥に沈めた小箱の鍵と一致し、しまいこんだはずの記憶たちが勢いよく飛び出してくる。

「ねえ、千笑って名前にしない？　たくさん笑う子に育つように」

そう言って幸せそうに笑った妻を思い出す。病院の白いベッドの上で体を起こし、大きくなったお腹をいとおしそうにさすりながら、優しい瞳で僕を見つめていた。妻の表情は妊娠がわかったときから少しずつ柔らかくなっていき、出産間近ではすっかり母親らしい寛大な笑顔を浮かべるようになった。男の僕にはそんな身体的な変化がないので、体の状態が変わっていくことによって、精神的にも親らしく変化していく妻が、少しだけうらやましかった。

「私ね、悲しみに勝つものって笑いしかないと思うのよ」

妻は強いまなざしを向けて言う。

「笑顔って幸福と連動しているような気がするの。幸せだといっぱい笑いたくなるし、笑えばちよつとだけ幸せになれるでしょ？ だからどんな悲惨な状況でも笑えばきつと大丈夫。私はそう信じているの」

「君らしいよ」

僕が微笑むと、だからね、と妻は続けた。

「お葬式ってもっと楽しそうにやるべきだと思うの」

僕は慌てて室内を見回し、気分を害した人がいないか確認した。妻の言葉が聞こえなかったのか、同室の妊婦さんたちは皆いつもどおりに振舞っていて、僕はほつと胸を撫で下ろす。

「過敏になりすぎよ。現代の医療は進歩しているんだから、そう簡単には死ねないわ」

妻はさんざん声を上げて僕の動揺した姿を笑うと、何事もなかったかのように平然と話を元に戻した。

「だって、人が死ぬっていう事実だけで悲しいことなのに、あんな重苦しい雰囲気の中にいたら、もつともつと悲しくなるでしょ。死んじやったあの人は本当にいい人だったよね、っていう感じの歌でも陽気に歌いながら、参列者一同が町中を練り歩くくらいがちょうどいいのよ」

「まるでパレードだ」

僕は喪服を着たたくさんの人たちが、一列になって道路を行進しているさまを想像した。異様な光景ではあるけれど、悪くない。悲しみなんて簡単に忘れられるわけがないのだから、それぐらい奇抜なことをして気を紛らわせてもいいはずだ。

「あなたピエロなんだから、私が死んだらお願いね」

「無理言うなよ」

「じゃあ、帽子から白い鳩を出して。ピエロだもん、簡単にできるでしょ？」

妻はシルクハットらしきものを両手で形作り、そこから透明な鳩を取り出した。できないよ、と僕は笑って首を振る。

「ピエロとマジシャンを一緒にしてない？」

「どっちでもいいじゃない」

妻はあっけらかんと言い放ち、どっちも人を笑顔にするんだから、と微笑んだ。

親になることのおびえがあった僕には、ベッドの上での妻の笑顔がとても心強かった。妻のふつくらとした笑顔を見ると、不安なこともどうにかなるような気がしてくるから不思議だ。

しかしその一週間後、妻はお腹の子供と一緒に突然逝ってしまった。出産時の大量出血によるショック死だった。僕は不意の出来事に呆然とし、打ちひしがれ、そして絶望した。おとといが二人の葬儀だったが、底なし沼のような悲しみに沈む僕に、パレードなんてできるわけがない。

あ、という声が聞こえて、僕は現実引き戻された。唇を強く噛み締め、涙を流さないように気をつけながら、ゆっくりとまぶたを持ち上げる。先ほどチエと呼ばれた少女が、目の前でうつ伏せに倒れていた。走って転倒してしまったのだろう。可愛らしいフリルのついた黄色いスカートがめくれ、白いパンツがむき出しになっていた。

「大丈夫？ ほら」

おずおずと手を差し出すと、少女は今にも泣き出しそうな顔を上げて、僕の手を見つめた。逡巡したようなわずかな間のあと、きっぱりと首を振る。

「自分で立てるもん」

少女はそう言い放ち、ゆっくり立ち上がるとする。華奢な膝小僧からは真っ赤な血が流れ出しているの、決して痛みがないわけではないのだろうが、それでも少女は自力で立ち上がると得意げに笑ってみせた。目を細めた瞬間、少女の瞳にたまっていた涙が一粒、地面に零れ落ちた。

その光景は僕の胸の中に暖かな風を吹かせて、充滿していた陰湿な悲しみを一瞬で乾かした。悲しみに埋没することは容易だ。しかしそれは甘えであり、また弱さでもある。僕はやっとそれに気づき、自分の軟弱さを恥じた。

人間ってすごいな、と改めて思う。こんな幼い少女でさえ痛みをこらえて笑っている。笑えない状況でも笑う強さを持っているのだ。僕は少女のことを強く抱きしめ、おかつぱ頭を何度も撫でた。

「なんで笑いながら泣いているの？」

少女が不思議そうに顔を覗き込んだとき、僕はやっと自分が涙を流していることに気づいた。抑えようとしても止められない。泉のように次から次へとあたたかい涙が湧き上がり、ピエロの化粧を落としながら顔を滑っていく。しかし気分は晴れやかだった。

僕は持っていたピンクのブードルを少女に渡し、涙で汚れた顔を隠しながら、そそくさ

と屋上を後にした。誰も居ない休憩室に入り、隅っこに置かれた大きなダンボール箱を漁る。中にはたくさん風船が入っていて、顔を近づけると強烈なゴムの臭いが鼻をついた。やつとのもので目的のものを探し出し、ヘリウムガスを入れると、窓辺に立ってカーテンを開け放った。

「白い鳩は無理だったよ」

そう言い訳して、小さな窓から白い風船を二つ、青空へ放った。穏やかな風に乗る、寄り添うように並んで、二つはゆっくり天に昇っていく。

気持ち良さそうに漂う風船を見上げながら、笑っていよう、と僕は思う。悲しいときも痛みをこらえて笑う強さを持つと、と。どこかで見守ってくれている妻と子供に、情けない姿は見せたくない。

「どんな悲惨な状況でも、笑えばきっと大丈夫」

風船が消えてしまった青空を見つめながら、妻の口調を真似て、自分に言い聞かせた。